九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[033_1992]第三十三回中央図書館貴重文物展観目録 : 蒙古襲来絵詞を中心とした郷土資料

九州大学附属図書館中央図書館

川添, 昭二
九州大学 : 名誉教授

https://doi.org/10.15017/1485021

出版情報：大学広報. 776, pp.4-7, 1992-10-19. The Committee of Public Relations Kyushu University
バージョン：
権利関係：

第33回　中央図書館貴重文物展観及び公開講演会について
― 蒙古襲来絵詞を中心とした郷土資料 ―

（中央図書館）

今回中央図書館では，教育・文化週間行事の一環として，標記の展観及び公開講演会を実施しますので，多数参加されますようご案内します。

なお，展観資料の解説については，川添昭二本学名誉教授のご協力を頂きました。

また，標記企画にあたって文学部佐伯弘次助教授をはじめ関係の方々にご尽力を頂きました。ここに厚くお礼申しあげます。

1．展　観

日　　時：平成４年11月４日(水)から11月７日(土)まで
10：00～16：00

場　　所：中央図書館自由閲覧室

対　　象：一般市民及び本学教職員，学生

展観資料：蒙古襲来絵詞（上下２巻）及び関係資料
貝原益軒書簡　自筆，末永景順「筑前国宝鑑」自筆本，
亀井昭陽「傷逝録」自筆本，大隈言道書簡　自筆

2．公開講演会

日　　時：平成４年11月６日(金)　13：30から

場　　所：中央図書館視聴覚ホール

対　　象：一般市民及び本学教職員，学生

講　　師：川添昭二本学名誉教授

演　　題：「蒙古襲来絵詞と竹崎季長」

展観資料目録

◎蒙古襲来絵詞　２巻

九州大学附属図書館蔵　幅40cm　長さ　上2,255cm　下1,821cm

蒙古襲来絵詞（竹崎季長絵詞）は，肥後国の武士である竹崎季長が文永11年（1274）と弘安４年（1281）の二度にわたって日本を襲ったモンゴル族の侵入，いわゆる元寇に際しての自らの戦功を録したものである。前後各１巻。前巻は文永の役における季長の活躍と，役後，鎌倉におもむいて戦功が認められないことを直接に訴えた段とからなっている。後巻は主として弘安の役における季長の戦陣馳駆の状況が録されている。成立は鎌倉末期といわれる。記録的・写実的で筆力は強い。御物本は明治23年に大矢野家から宮内省に納められた。模本は現在十余種あり，九大本はその一つ。外箱によって同本の原本が阿蘇宮にあったことが知られる。詞15，16は御物本とは全く別の書体で書かれ，また御物本で損傷している部分が，九大本ではいくらか残っているので，模本中でも貴重なものである。

◎影印秘府本蒙古襲来絵詞　２巻
◎元寇紀略　２巻
◎蒙古諸軍記辨疑　上下２巻
◎蒙古襲来研究史論　川添昭二著　昭和52
◎注解元寇防塁編年史料　川添昭二著　昭和46
◎蒙古襲来絵詞（日本絵巻大成14）　中央公論社　昭和53
◎蒙古寇紀　上下２巻
◎参考蒙古入寇記　巻１－５
◎伏敵編

◎貝原益軒（1630－1714）

福岡が生んだ元禄前後の碩学。寛永7年（1630）福岡藩士貝原寛斎の末子として福岡城内の下級士族の官舎に生まれる。少壮のころ，たびたび江戸・京都に遊学して山崎闇斎・松永尺五・木下順庵・伊藤仁斎らの大儒に学び，その後，朱子学をもって福岡藩儒・侍講となり，藩主黒田光之の知遇を受けた。恭黙謹直，博学洽聞であって，『和漢名数』『大和本草』『黒田家譜』『筑前国続風土記』『大和俗訓』『養生訓』『慎思録』『大疑録』『近思録備考』など，儒学・教育学・史学・博物学・天文学・算学等にわたって，総計150部をこえる大小の著述がある。正徳4年（1714）没。85歳。

『貝原益軒書簡』 自筆

益軒の書簡は，郷土史家故伊東尾四郎氏が調査整理し，九大附属図書館（542通，109巻）と福岡県立図書館（県文化会館）とが折半して分割購入している。本館所蔵の書簡は，その内容から「家譜」「風土記」「編著」「書籍」「雑」などに分類されている。

◎末永景順（1635－1729）

寛永12年（1635）久留米に生まれる。貝原益軒に師事し，直方藩の黒田長清に仕え，致仕後，虚舟・了仲と号した。地理学に精通し，著書に『筑前国宝鑑』20巻がある。享保14年（1729）没。95歳。

『筑前国宝鑑』残9巻9冊　末永景順著　自筆本

著者末永景順（虚舟）の自筆本残巻。本館には，古城古戦場記3巻・寺院記3巻・名所記2巻・旧跡記1巻の計9巻9冊を存する。

『宝鑑』は，元来このほかに神社記7巻，寺領録・廃寺記・郡村記・惣目録各1巻があり，計20巻20冊から成る筑前一国の分類形式の地誌である。著者の景順は，貝原益軒が『筑前国続風土記』を編纂した時の助力者であり，殊に益軒がこの書を福岡藩に献上する際には，つぶさに全巻を筆写した人物である。景順の『宝鑑』撰述の志は既に延宝年間に発しており，元禄13年（1700）には古城古戦場記に序し，名所記は宝永6年（1709）の序をもつ。本書を著わすに当たって，彼は常に古文献を渉猟し，現地を踏破して調査編述につとめている。従って，その間『続風土記』の編纂には，彼の知識をそれに加えた所もあったろうが，一方彼は，それから得る所も多く，しばしば『続風土記』はじめ益軒の著書から引用する。宝永6年浄書後の補筆も見え，彼の畢生の著であったことがしのばれる。

◎亀井昭陽（1772－1836）

江戸後期の福岡が生んだ当時天下第一等の碩学。安永2年（1772）亀井南冥の長子として生まれる。諱は昱，字は天鳳，昱太郎と称し，昭陽はその号。別に月窟・空石・天山遯者などとも号した。すでに十五歳で『范増韓信優劣弁』を著したほどの俊秀であって，寛政3年（1791）徳山藩儒役藍泉に学び，帰国後，父南冥の後を襲って儒官に挙げられ家督を継いだ。寛政10年（1799）福岡藩の藩校である昭陽主宰の甘棠館が全焼して同館は廃止され，昭陽は儒官を免ぜられて西学甘棠館15年の歴史は終った。その後，昭陽は百道に移り住み，その私塾は百道社または亀井塾と呼ばれて入門者が相次いだ。文化6年（1809）烽火番勤務。文政12年（1829）次男暘洲が家督を継ぎ，昭陽は隠居7年，講書・著述に励み，天保7年（1836）5月17日，64歳で没した。

『傷逝録』中巻　亀井昭陽著　自筆本

昭陽の末子修三郎は，昭陽50歳の文政5年（1822）7月13日，わずか6歳で急逝した。聡敏な愛児を失った昭陽の打撃は大きく，事につけ折にふれて追憶し，夢の中で相見えたことを日記に綴っている。本書はこの愛児の追悼録で，もともと3巻ならびに附録1巻より成る。

この自筆本は中巻に相当する部分であるが，前後にそれぞれ若干の欠失がある。随所に押紙があり，刪訂の跡が見られる。37丁，1紙9行20字平均，印刷罫紙使用。なお，昭陽自筆の上巻の方は慶応大学に所蔵。下巻自筆本は亡逸したが，その正統写本は百道社から出ている。

◎大隈言道（1798－1868）

寛政10年（1798）福岡薬院に生まれる。通称は米屋清助といい萍堂と号した。自らもいうように「市井の商人」であった。福岡藩の二川相近に和歌や書を学び，日田の広瀬淡窓に儒学詩文を学んだ。天保7年（1836）家を弟に譲り，今泉の池萍堂（ささのや）に退隠。安政4年（1857）60歳のとき大阪に上り，歌集を梓行して新歌風を世に問うた。元治元年（1864）中風を発し，慶応3年（1867）ごろ帰国。明治元年（1868）7月29日，71歳で没した。

『大隈言道書簡』1通　自筆

本書簡は，大阪から飯塚の門人小林重治に宛てたもので，言道の大阪時代の生活ぶりを彷彿とさせる。小林重治は飯塚で代々酒造業を営み家は富んでいたので，言道が『草径集』を上梓するとき陰に陽に費用を援助している。言道は飯塚滞在中の嘉永4年（1851）夏，自撰の『春野集』（本館蔵）を贈っている。横121.8cm 縦15.7cm。継紙3紙。